

ICAS 活動予定

◇ 環境科学からサステナビリティ学へ ◇ - アジアの農学の役割を考える -

大学院 GP「地域サステナビリティの実践農学教育」のプログラムの一環として、アジアの農業をテーマとしたワークショップが開催されます。アジア各国の教員に加え、インドネシアからの学生も参加予定で、学生の国際交流も図る予定です。

日時：1月12日(月)・13日(火)
場所：農学部こぶし会館2階研修室

◇ プログラム ◇

Keynote and Plenary Lectures

- 1 何を食べるべきか？食の生態学的考察(1/12)
- 2 持続的統合型農業のコミュニティ・カレッジ(1/12)
- 3 農学教育を通しての持続的農村開発、スリランカでの事例(1/13)

Sessions

- 1 アジアの環境変化：私たちの理解を最新化する(1/12)
- 2 今の時代の食料とエネルギーの問題：農業の役割は何かを考える(1/12)
- 3 守るべきか、変えるべきか：持続的農業のあり方を考え直す(1/13)

お問い合わせ先：茨城大学農学部・太田寛行・教授
TEL/FAX：029-888-8684/8525

hohta@mx.ibaraki.ac.jp

ICAS 活動報告

◇ 第3回 ICAS・TIEPh(東洋大学)共催国際セミナー ◇

今回で3回目となる国際セミナー「持続可能な発展と自然・人間——西洋と東洋の対話から新しいエコ・フィロソフィーを求めて」が、11月8日に開催されました。

今回は機関長の三村先生による開会のご挨拶からはじまり、11月から茨城大学大学院サステナビリティ学教育プログラム・コーディネーターに着任した上柿崇英氏による、「環境思想史から見たエコ・フィロソフィーの課題」と題した問題提起がなされました。

前半部では、日本大学の小坂国継先生、武蔵野大学のケネス田中先生、東洋大学の竹村牧男先生より、エコロジー経済学から仏教思想までの幅広い立場から、エコ・フィロソフィーがもたらした意義について論じられ、後半部では、茨城大学特任教授のジェフリー・クラーク先生、茨城大学の中川光弘先生、サングラハ教育・心理研究所の岡野守也先生より、エコ・フィロソフィーのもつ社会的・実戦的意義について活発に論じられました。

今回のセミナーでは、これまでエコ・フィロソフィーが培ってきた重要な視点を再確認しながらも、同時にエコ・フィロソフィーが直面している時代的な課題についても貴重な意見交換がなされ、とても意義のあるものになりました。

ICAS/IR3S Calendar

4月	新年度スタート 4/7～ ICAS 研究発表会・開始 毎週月曜日 14:00～ 4/17・18 IPCC-IR3S サイエンス・シンポジウム	9月	9/12・13 IR3S 後援：日本学術会議(SCJ)国際会議 9/24 IR3S-ICB 2008 ジョイント・シンポジウム 9/26 第3回いばらき地域サステナワークショップ 9/28 霞ヶ浦研究会年会
		10月	10/2 社会連携事業シンポジウム(水戸)
5月	5/19 第1回 ICAS サステナフォーラム	11月	11/1・2 第4回茨城大学国際学生会議 11/8 ICAS・TIEPh(東洋大学)共催国際セミナー(土浦) 11/28・29 第2回ベトナム・日本シンポジウム(ハノイ)
6月	6/4 第2回いばらき地域サステナワークショップ 6/14 第1回集中講義「サステナビリティ学入門」 6/28 第2回集中講義「サステナビリティ学入門」	12月	12/11 第2回国際教育シンポジウム(水戸) 12/12 第3回 ICAS 第1部門ワークショップ(水戸)
		1月	1/12・13 大学院 GP 教育ワークショップ(阿見)
7月	7/9 第2回 ICAS サステナフォーラム 7/12 第3回集中講義「サステナビリティ学入門」	2月	IR3S 公開シンポジウム アジア・メガデルタ・シンポジウム "Cities at Risk" (バンコク)
8月	8/9～22 IPoS2008 開催(タイ)	3月	3/2～4 IR3S 共通コア科目「サステナビリティ学最前線」 3/6 「バイオ燃料・地域農業イノベーション研究」ワークショップ(水戸)

*網掛けは継続される企画です

ICASの予定に関するお問い合わせは ICAS 本部まで

icas@mx.ibaraki.ac.jp

◇ 今年も海外からの教授がぞくぞく来日！ ◇

— Part 2 —

今年度も ICAS では海外から著名な研究者をお招きして、講演やセミナーなどで協力していただいています。前号に続いて、来日している招聘教員のメッセージを紹介し、今回は研究やシンポジウムで ICAS と深い関わりのある、ハノイ科学大学(ベトナム)准教授の Do Minh Duc 氏(ICAS 特任准教授)からのメッセージを紹介し、

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

私はもし来日したことが何回あるのかと尋ねられたら、しばらく立ち止まってその回数を数えてしまうかもしれません。しかし、ICAS News の記事執筆を依頼されたことにまだ驚いております。長い間、日本は私にとって最愛の国です。ICAS や茨城大学の人々は親切で友好的なので、私はいつも故郷にいるように感じてしまいます。したがってここ日立での滞在に関する記事は私の故郷やベトナム・ハノイの日常生活について書くような感じです。

私はハノイで安原先生に初めてお会いしたときのことを今でも覚えています。安原先生は確か私の父と同じ年ですが、活発で愉快な人だと感じました。それ以来、私は安原先生とともにワークショップを開催したり、フィールドトリップに出かけたりするようになりました。そして私は ICAS や茨城大学の多くの教授や若手研究者、さらには学生と出会う機会を頂きました。どの方も研究において積極的で日常生活において最愛の人々です。さらに ICAS の方々は国際的かつ一貫した思考をもっています。このことは地球規模の深刻な問題である気候変動に対処するための非常に基本的な背景に基づいています。

最初、私は気候変動がもたらす自然災害を研究するためにここ茨城大学にやって来ましたが、まもなく ICAS の活動を通して急速かつ多面的な次元をもつ気候変動の社会、経済、生態系への全世界への影響を認識しました。私は高い水準にある ICAS のワーキング・グループとその機敏な活動により、気候変動の適応策の科学的分野における ICAS の影響が拡大していると信じています。

現在、気候変動は世界の発展にとって深刻な弊害です。我々の全てはこの問題を 1 人で解決できないことを知っています。我々は経験を共有しともに行動しなければなりません。それゆえスタッフの交流と科学的知見の交換は重要な役割を果たします。ICAS での活動は私にとって気候変動問題について研究し知識を共有する良い機会です。私は ICAS の皆様の心の広さと親切さに感謝しており、日本の生活や文化を学ぶ上でそれらに大変助けられています。私はまた日立でフィールドワークやパーティも楽しんでいきます。

どうもありがとうございました。皆様の幸福と成功をお祈りします。

(翻訳は長谷川良二・ICAS 特任研究員)



☆ ICAS 海外招聘教員によるフォーラムを開催 ☆

11月17日に ICAS がお招きしている海外招聘教員によるサステナビリティ・フォーラムが開催されました。今回のフォーラムでは「地球変動と地域開発の持続可能性」と題して、アメリカから Jeffrey Clark 氏、ベトナムから Do Minh Duc 氏、ニュージーランドから John E. Hey 氏の 3 名にそれぞれの視点からサステナビリティに関する講演をお願いしました。

Clark 氏は、アメリカで精神病患者が増加するなど非持続可能な状態となっている一方で日本の伝統文化は長期にわたって継続していることなどを例に、持続可能な社会を導くためには技術と社会を繋ぐ精神の役割が重要であることを指摘しました。Duc 氏はベトナムの沿岸域における地盤災害などの自然災害の現状を説明し、その適応策を紹介しました。Hey 氏は現在の私たちが環境問題、経済・開発問題、人道的問題などが複雑に絡み合った状況であることを指摘した上でそれらに包括的に取り組むための国際的な枠組みや研究事例を報告しました。

初学者でも講演内容が分かるように、各発表の合間には簡単な日本語の解説が入られました。そして、質疑応答も交え、最新の研究状況や有効な対応策に関する活発な議論が行われました。

フォーラム終了後は ICAS 事務局で懇親会が行われました。教職員だけでなく学生も参加しアットホームな交流が繰り広げられました。



ICAS on MEDIA

==== 茨城放送ラジオ出演 ====

今年 4 月から茨城放送のラジオ番組「夕刊ホット」の「ほっとで地球を考える」コーナーに ICAS 教員をはじめ茨城大学の先生方が毎月第 3 火曜日に好評出演中です。

==== 茨城新聞好評連載中 ====

12 月はサステナビリティ教育をテーマにした「次世代につなぐ」シリーズが連載中です。昨年 6 月 26 日から始まった「茨城大学発・持続可能な世界へ」の連載も今月の 23 日時点で 74 回目を迎えました。現在 ICAS メンバーは、これまでの連載を通して明らかになった持続可能な社会に向けた展望と課題をまとめることを目的に連載記事を題材にした書籍の出版を検討しています。

Editor's Note

今年も一年が終わりました。来年も成果を出せるよう教員・研究員・事務スタッフ一丸となつてがんばりたいと思います。

よいお年を！ Happy New Year！

◇ 第2回ベトナム・日本国際シンポジウム ◇
 - 気候変動と持続可能性に関する国際会議 -

ICAS のビッグイベントの1つであるベトナム・日本国際シンポジウムが今年度も無事終了しました。第2回目となる今回も昨年度に引き続きベトナムで開催されましたが、今回はハノイ市のハノイ科学大学が会場になりました。ここでは ICAS News 特別編としてシンポジウムや ICAS メンバーのベトナム滞在の様態をたっぷりご紹介します。

☆☆☆ シンポジウム前日 ☆☆☆

日本からは約20名の教職員と大学院生が参加しました。ハノイ科学大学のスタッフが空港まで迎えに来ていただき、送迎バスでハノイ市のホテルまで案内して下さいました。

明日のシンポジウムに向けたミーティングも兼ねて(!?)、日本のメンバーは全員一緒に夕食をとりました。日本のメンバー同士でも初対面の人もいて、シンポジウム前日にまずは日本のメンバー間の交流を深めました。



シンポジウム第1日目 (2008年11月28日・ハノイ科学大学大会議場)

シンポジウムの第1日目はハノイ科学大学大会議場で開催されました。今回のシンポジウムでは日本・ベトナム双方で約120名の研究者と学生が参加しました。ICAS 特任教員でもある Duc 氏(ハノイ科学大学准教授)による司会の下、Mai Trong Nhuan 教授(ベトナム国家大学総長)、三村信男教授(ICAS 機関長)、Nguyen Hoang Luong 教授(ハノイ科学大学副学長)3氏によるオープニング・セレモニーからシンポジウムは始まりました。オープニング・セレモニーにおいてベトナム・日本それぞれの気候変動による被害が紹介され、各専門分野の研究者が参加する気候変動と持続可能性に関するシンポジウムの重要性が強調されました。



オープニング・セレモニーの様子：左から Mai Trong Nhuan 教授(ベトナム国家大学総長)、三村信男教授(ICAS 機関長)、Nguyen Hoang Luong 教授(ハノイ科学大学副学長)



シンポジウムの様子

第1日目は6名の方の特別招待講演、およびキー・レクチャーと一般報告からなる4つのセッションで構成され、延べ19件の報告が行われました。気候変動のメカニズムと影響・被害、その緩和策や適応策、人間・社会的な側面など、さまざまな視点から気候変動と持続可能性についての報告と議論が展開されていきました。

コーヒー・ブレイク
でつかの間の休息。
参加者間での交流も
深まります。



ハノイ科学大学の学生
の皆さんには大変
お世話になりました。



第1日目は教員と研究員による報告で構成されていたのですが、学生も積極的に議論に参加していたことが印象的でした。各報告において教員・学生の垣根を越えた白熱した質疑応答が繰り広げられ、予定時刻を大幅にオーバーしてシンポジウム第1日目は終了しました。

シンポジウム第2日目 (2008年11月29日・ハノイ科学大会議室)

シンポジウムの第2日目は大学院生を中心とした8件の研究報告が行われました。第2日目はハノイ科学大学のキャンパス内の一室で開催されましたが、シンポジウムの内容に興味をもった学生が飛び入りで聴講する場面もありました。学生の報告に対し、日本・ベトナム両先生方の質問やコメントは温かみを感じられ、研究成果の評価と今後の課題を指導して頂いたような印象を受けました。研究報告の後にクローリング・セレモニーを行い、最後は両大学で記念品を交換し合い、2日間にわたって開催された第2回ベトナム-日本国際シンポジウムは無事閉幕しました。



大学院生による研究報告の様子



両大学での記念品の交換



シンポジウム終了後にフィールド・トリップが実施されました。今回はハノイ市近郊のレッド・リバーや田園地帯の浸水・氾濫箇所を視察しました。ハノイ周辺の地域でも気候変動の影響が確実に迫ってきていることが認識されました。

今後はシンポジウムの開催にとどまらず、研究面・教育面で日本・ベトナム間の交流をさらに深めることが合意されました。ベトナム国家大学との共同調査の実施や単位互換制度の導入など具体的な企画も提案され、より一層の協力関係を強化していくことが検討されるに至りました。



シンポジウム終了後の記念撮影



フィールド・トリップで訪れた浸水・氾濫箇所